

長崎県佐世保市で高1女子生徒が殺害され、同級生が逮捕されてから2カ月あまり。少年犯罪はこのところ減少傾向にあるが、時に凄惨(せいさん)な事件も起きる。少年事件が社会に問いかけるものは何か。私たちがくみ取るべきものとは。

「捨てられた」感じさせるな 元裁判官・弁護士 井垣康弘さん

1997年から退官する2005年まで神戸家裁にいました。須磨区で起きた小学生連続殺傷事件の少年の審判を担当しました。

当時から2～3だった彼が事件を起こした動機は、脳の未発達が原因での性的サディズムです。面談して射精のときにどんなイメージが浮かぶのかと聞くと、「人間の内臓にかみつき、むさぼりつくシーンを思い浮かべる」と答えました。自分が異常だと悩み、こんな状態では生きていく希望を感じられないと、人を殺して死刑にしておこうと考えたのです。

防ぐことができたかもしれないという機会はありました。年月を経たので話しますが、親がスパルタ教育をしないで普通に育てていれば切羽詰まった彼が相談していた可能性がありました。

また、中1のときに精神科医の診断を受ける機会がありました。医師は思春期の少年に対する初歩的な問診を怠り、射精時のイメージを聞き忘れしました。もしそこで性的サディズムを発見し、その後に正常に発達する可能性があることを伝えていれば、犯行を食い止められたかもしれません。

殺人の前に彼は2人の小学生をハンマーで殴ってけがをさせています。2人は制服を着ていた「犯人」の顔を覚えていた。地元中学の在校生の写真一覧を見ればわかると警察に行きましたが、対応してもらえませんでした。このときちゃんと捜査していれば、殺人事件には至らなかったでしょう。

■社会への「一撃」

社会は重大事件を起こす子どもを「モンスター」「野獣」とみます。実際は、母親から「あんたみたいな子、産まなかったら良かった」などと嘆かれ、教師からは「お前は学校に来るな」とののしられ、**だれからも認めてもらえないために生きる意欲を失った子どもです。自殺する子ども多いのですが、親や教師を含む社会に「恨みの一撃を与えてから死にたい」と思ったごく少数の子どもが無差別の殺人事件を起こすのです。**

だから、事件後もそのまま生きる意欲を失ったままです。証拠のひとつとして、少女は生理が止まり、少年は性欲がなくなるようです。須磨区の事件を起こした彼も事件後2年は一切の性欲が消えました。その間は「死なせてくれ」と言い続けました。その後、脳の性中枢が通常の発育を遂げ、性的サディズムから回復、事件後3年ほどしてやっと生きることに前向きになりました。被害者や遺族の深い悲しみについて考えられるようになったのはそれからでした。

今回の佐世保事件では、15歳の少女が自分の人生を捨てる決心をせざるを得ないような状況に追い込まれていたことに心から同情します。しかし、社会では彼女に対して「かわいそう」という声は全く出ません。凶悪事件を起こしても子どもは保護されて生きる機会を与えられることを知っている世間は、被害者と同じ視点で彼女を加害者としてだけ見ます。

■詳細示し教訓に

彼らがなぜこういうことをしたのか社会は克明に知るべきです。生きる意欲を失った経過、社会に対する恨みの内容、一撃を加えたいと思った理由などは家裁の調査で判明します。詳しくわかれば、事件を防ぐ方法も見つかる。そのために家裁は克明な決定書を公表すべきで、メディアも審判の代表取材を求めるべきです。社会が何を教訓としたらいいのかを知らせなくてははいけないと思います。

私は家裁で約6千件の少年審判を担当しましたが、鑑別所に入る中学生はほとんどが離婚家庭の子ども。養育費の支払いもなく父親から完全に捨てられた形になっている子は、月に5千円でも送金されている子よりはるかに自己肯定感が低い。そのうえ彼らは学校でも落ちこぼれ、分数はできず、漢字もほとんど書けません。親の離婚、再婚に関連して子どもを放任するのは、「社会的虐待」です。

親の離婚そのものは仕方なくても、子どもが「捨てられていない」と感じられることが非常に重要です。一刻も早く別れたいという思いで養育費はいらないという母親が多いですが、それは危険な行為です。日本では離婚や再婚に伴う「虐待」が平然と多量に行われていることをまず自覚しなくてははいけないと思います。

(聞き手 編集委員・大久保真紀)

いがきやすひろ

40年生まれ。67年裁判官に任官、05年の退官後に弁護士。退官直前にがんを患い声帯を摘出、笛式人工喉頭(こうとう)を使う。著書に「少年裁判官ノオト」など。